要約トレーニング（５／１５）　　　　年　　組　　番　名前

1 福沢諭吉は、「society」を、初めの頃はそのまま「ソサエチー」と言っていたのを、「仲間連中」と訳し、これでは馴染まないとして、さらに「社会」という言葉に訳したりしている。またよく知られていることではあるが、「哲学」というのも翻訳語である。この言葉は西周の造語であるが、彼は、「philosophy」を「愛智」、「希哲学」、そして最後に「哲学」という言葉として定着させた。江戸時代や明治時代の医者や思想家、哲学者は、日本にはそれまでなかった新しい概念や考え方を日本に根付かせようとしていた。

2 そのためには、発音をそのまま〈カタカナ〉で書くカタカナ語ではだめだと考えていた。カタカナ語では我が国の文化に異質のものとして残っていくことになってしまう。だが、〈ひらがな〉では深い思想を示すことはできない。この点で、意味を彷彿させる漢語が最も適当であった。

3 〈カタカナ〉で原語の発音を書き表すのとは異なる訳語の世界は、たとえば映画のタイトルにしても、つい最近まで行われてきた。テネシー・ウィリアムズの戯曲「A Streetcar Named Desire」を「欲望という名の電車」と訳したり、「An Officer and a Gentleman」を「愛と青春の旅立ち」と訳すなど、いわゆる「邦題」と言われるものだが、こうしたものはまさに名訳と言うにふさわしいものであろう。しかし、最近では、映画にあまり邦題がつけられなくなってきつつある。原題をそのまま〈カタカナ〉で書いたものがほとんどである。そして、たとえ邦題があっても、以前のように名訳のタイトルと思われるようなものは少なくなってきているように思われる。

4 これは、科学技術や哲学、社会学に関する言葉についても同じである。もはや、明治時代までに行われたように漢語に訳されることはほとんどなく、〈カタカナ〉で専門用語が語られる。これでは、初学入門の者に対する敷居は高く、専門家はより専門家になって、他の分野から異なる分野を覗くことさえ難しくなってしまう。

5 学問の細分化は大切なことであるが、〈カタカナ〉が増えることで、専門家以外の人にそのおもしろさや重要さが見えてこなくなってしまうのはとても残念なことではないだろうか。

6 外来語が入ってくる量が当時に比べて格段に多いということが最も大きな原因であろう。

7 そして、それに伴って、当時に比べて言葉が持つ命の時間が非常に短くなってしまった。流行言葉は、時代を作っていくものとして重要なものであるが、そのスパンが泡沫のように消えていくとしたら、翻訳に時間を掛けていくこともなくなってしまう。

山口謠司『日本語にとってカタカナとは何か』二〇一二・四

【要約トレーニング】
①文章全体を読む。
②全体を三つの段落に分け、三つの段落それぞれの役割を考える。
③三段落それぞれの中で重要な一文に線を引く。
④文章全体の中で最も重要な一文に二重線を引く。
⑤文章全体を百字で要約する。

（100字詰め解答欄：25　50　75　100）

②ヒント　話題の展開と導入／話題の提示／原因と話題に沿った補足